

第2章 史跡を取り巻く状況

(1) 概要

函館市は、平成16(2004)年12月の市町村合併後、北海道南西部の渡島半島南東に位置する亀田半島の大部分が市域となっており、南は津軽海峡、北から東は太平洋に面している。市域の中央は亀田山地が占め、西側は函館平野が広がる。市の中心となる市街地は、津軽海峡に突出した函館山(標高334m)を軸とした扇形に広がり、市内には亀田川、松倉川、汐泊川などの二級河川をはじめ中小の河川が流れている。

史跡垣ノ島遺跡が所在する南茅部地域は、亀田半島北岸の太平洋に面しており、北海道の中では年間を通じ、気候は比較的温暖といえる。地理的には噴火湾の入口にあたるため、暖流と寒流の接する前浜はマコンブやタラ、マグロなど水産資源の豊富な地域である。

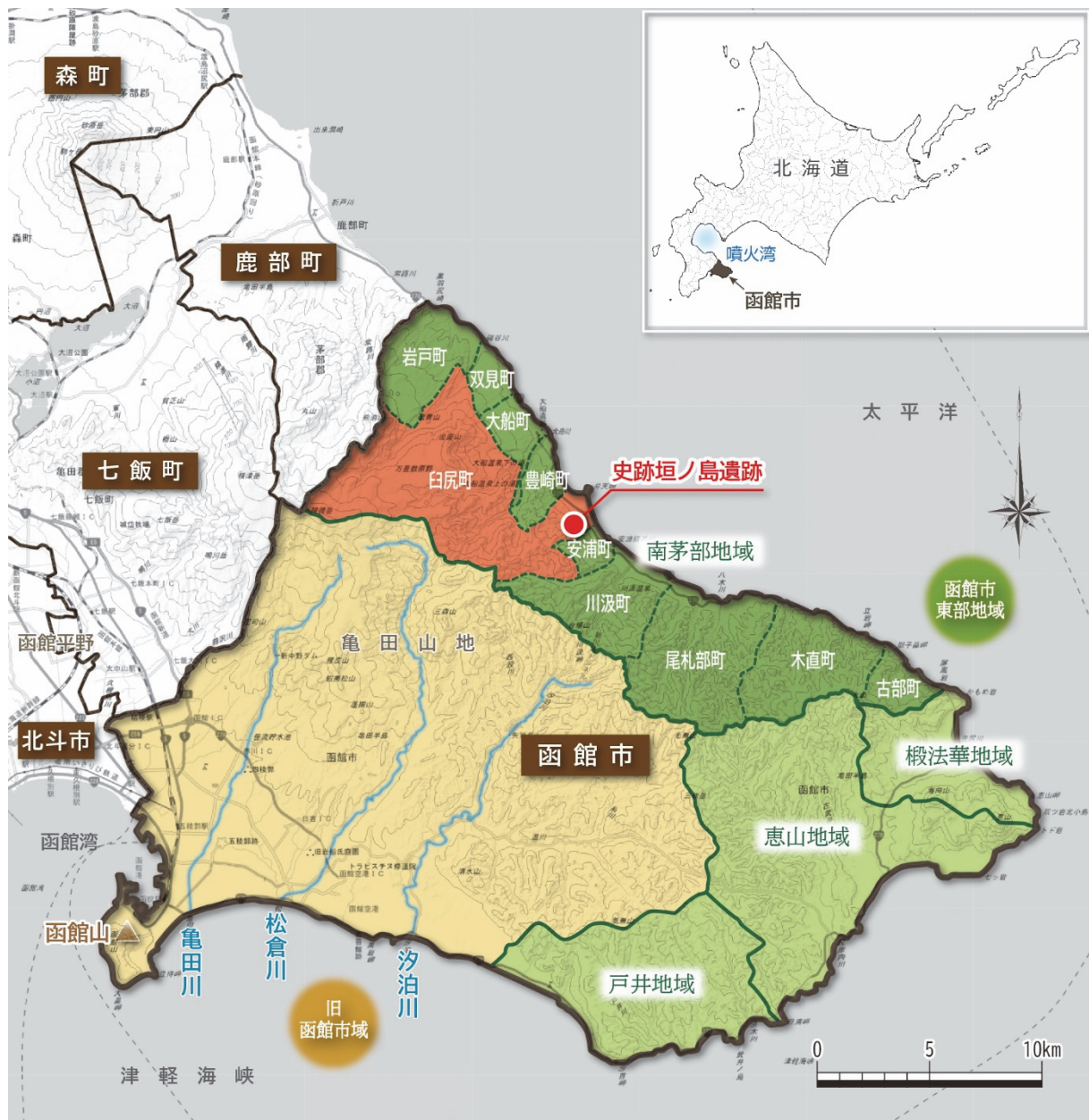


図2-1 位置図(市域・地域 S=1/30万)

道域…白地図(白地図専門店)をもとに作成
市域…地理院地図(国土地理院)をもとに作成

本史跡は、南茅部地域のほぼ中央を流れる垣の島川左岸河口付近の標高約32~50mの海岸段丘上に位置する。前浜には、弁天島（現弁天岬）など複数の小さな岩礁が連なって沖合に突き出ており、良好な漁場となっている。



写真2-1 弁天岬



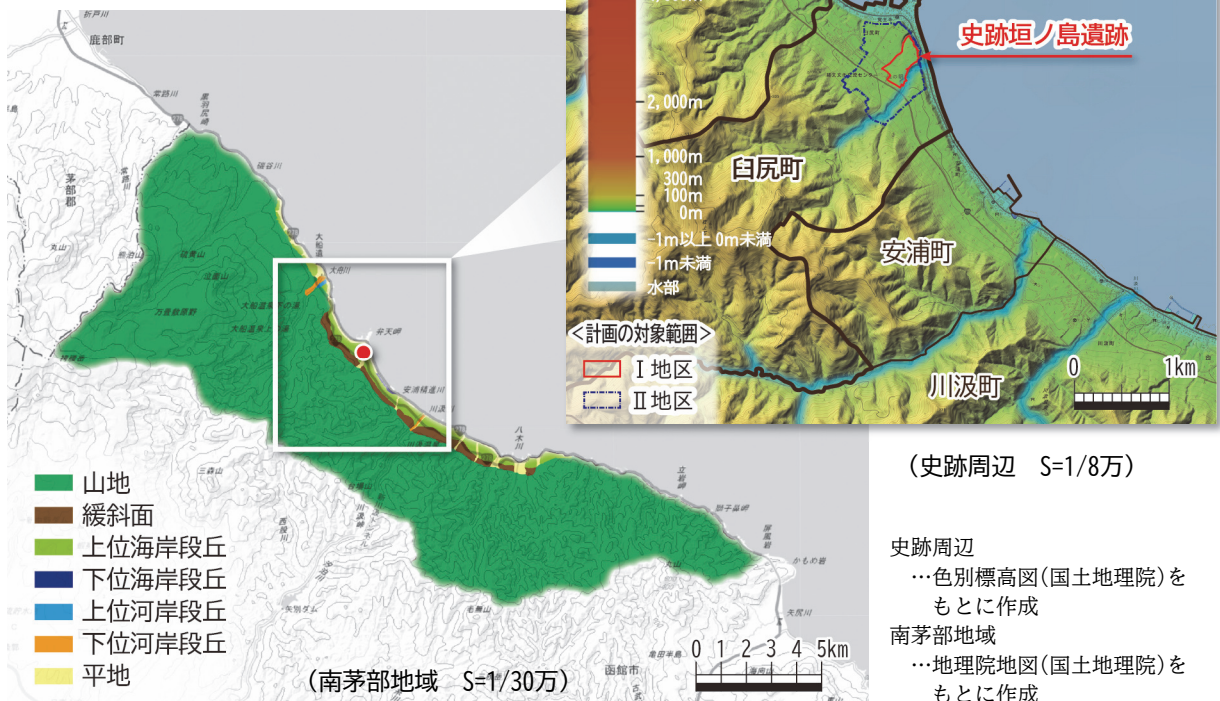
図2-2 位置図（史跡周辺 S=1/8万）
地理院地図(国土地理院)をもとに作成

(2) 自然的環境

ア 地形

本史跡の所在する南茅部地域の地形は、山地地形、山麓緩斜面、海岸段丘、河岸段丘、平地、海底地形に大別できる。

そのうち本史跡は、標高約32~50mの海岸段丘上に位置している。



(史跡周辺 S=1/8万)

史跡周辺
…色別標高図(国土地理院)をもとに作成
南茅部地域
…地理院地図(国土地理院)をもとに作成

図2-3 史跡周辺の地形図

イ 地質

本史跡の地質は、先第三紀の粘板岩からなる戸井層を基盤とし、この地層を不整合に覆って新第三紀の堆積岩類や火山噴出物が広く発達しており、安山岩や玄武岩が貫入している。本史跡のある段丘では新第三紀中新世の頁岩や凝灰岩からなる汐泊層が分布し、その上位には礫・砂・粘土からなる段丘堆積物が分布している。本史跡の所在する白尻地区は、段丘面を挟み、山側と海岸側には石器の素材となる硬質頁岩や頁岩の分布が広範囲に見られ、史跡南東側の段丘崖には「鳴岩」とよばれる頁岩の露頭もある。こうした石材に恵まれた環境が、大規模な縄文集落が成立する要因の一つになったと考えられる。



写真2-2 鳴岩

ウ 土壌

本史跡の所在する白尻地区は、山域に褐色森林土が広がり、史跡南東側は海岸から約1 kmの位置に、1～2 kmの幅で黒ボク土が帯状に分布する。史跡周辺から山裾にかけて黒ボク土地帯が帯状に見られることから、ススキやササなどの植生が広がっていたと推測されるが、これは里山など、人の活動によって形成された可能性もある。



写真2-3 土層堆積状況 (平成29(2017)年度調査)



<計画の対象範囲> □ I 地区 □ II 地区

H	砂・礫	Sg	凝灰岩・凝灰角礫岩・集塊岩
K	火山灰・浮石	PyII	安山岩質 ^o 珸 ^o ライトII
Ta	礫	Qp	石英斑岩
Td	礫・砂・粘土	Dp	石英安山岩質 ^o 珸 ^o ライト
Ft	砂層・礫層・泥層・亜炭	PyI	安山岩質 ^o 珸 ^o ライトI
Lv	集塊岩・凝灰角礫岩・凝灰岩 ・熔岩・熔結凝灰岩	Dr	閃緑岩質岩
Sh	硬質頁岩・頁岩・凝灰岩・砂岩	Dd	粗粒玄武岩

図2-4 史跡周辺の地質図 (S=1/8万)

地質図(産総研究 地質調査総合センター)をもとに作成



<計画の対象範囲> □ I 地区 □ II 地区

図2-5 史跡周辺の土壌図 (S=1/8万)

地理院地図(国土地理院),
土壌図(日本土壌インベントリー)をもとに作成

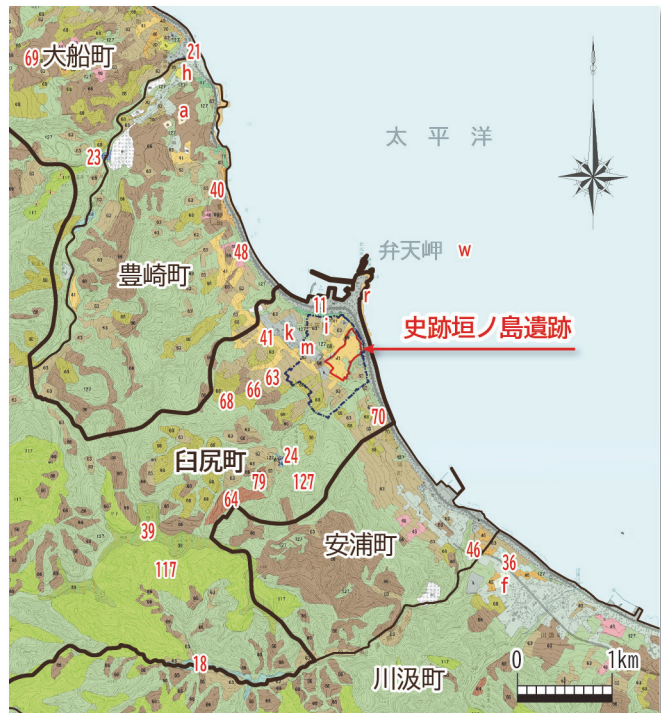
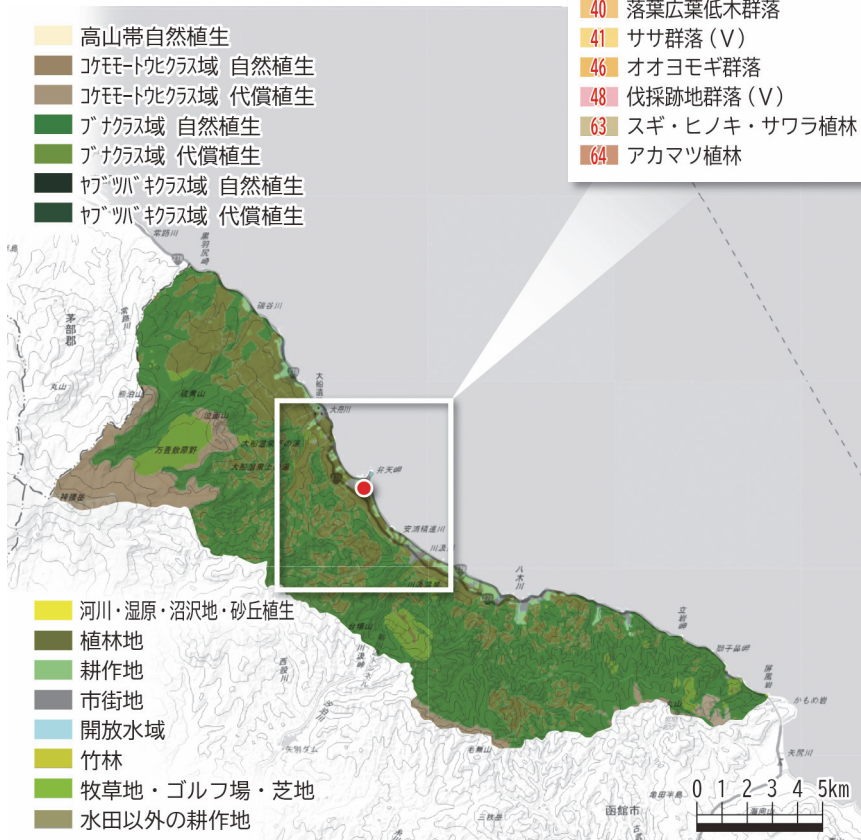
工 植生

南茅部地域の全般的植生と植物相は、本州の延長線上にあって、海岸に沿って街村状に発達している市街地と、これに伴う耕地、植林地を除いた全域のほとんどが夏緑広葉樹を主体とする自然林に覆われ、植生は豊かである。

本史跡の植生は、現在は人の手による開発が行われ、畑地と落葉針葉樹植林地（カラマツ）となっているが、縄文時代は史跡周辺に見られる自然植生のエゾイタヤ・シナノキ群集があったと思われる。エゾイタヤ・シナノキ群集はエゾイタヤ、ミズナラ、ハリギリ、ウダイカンバ、カシワが主な高木となる。



写真2-4 史跡内の植生



<計画の対象範囲> □ I 地区 □ II 地区

- | | |
|---------------------|--------------|
| 117 チシマザサバーナ群集 (IV) | 66 トドマツ植林 |
| 11 エゾイタヤ・シナノキ群集 | 68 カラマツ植林 |
| 18 ハルニレ群落 | 69 外国産樹種植林 |
| 21 ヤナギ高木群落 (IV) | 70 ニセアカシア群落 |
| 23 ヤナギ低木群落 (IV) | 79 ストローブマツ植林 |
| 24 ヤマハンノキ群落 | |
| 36 ササ・シラカンバ群落 | h ゴルフ場・芝地 |
| 127 シラカンバ・ミズナラ群落 | f 路傍・空地雑草群落 |
| 39 ダケカンバ群落 (V) | a 畑雑草群落 |
| 40 落葉広葉低木群落 | k 市街地 |
| 41 ササ群落 (V) | i 緑の多い住宅地 |
| 46 オオヨモギ群落 | m 造成地 |
| 48 伐採跡地群落 (V) | w 開放水域 |
| 63 スギ・ヒノキ・サウラ植林 | r 自然裸地 |
| 64 アカマツ植林 | |

(史跡周辺 S=1/8万)

史跡周辺

…植生図「白尻」GISデータ
(環境省生物多様性センター)を
もとに作成

南茅部地域

…地理院地図(国土地理院),
第5回植生図(エコリス地図
タイル)をもとに作成

(南茅部地域 S=1/30万)

図2-6 史跡周辺の植生図

オ 気象

南茅部地域の気象に最も大きな影響を及ぼすのは海流と背後に迫る山塊である。この地域の気象は、対馬海流（暖流）や千島海流（寒流）の影響を受ける海洋性気候であり、夏季には海霧が発生しやすい。令和7（2025）年の日平均気温は、7月から8月にかけての盛夏でも24℃程で、最高気温が30℃を超える日はごくまれである。一方、1月から2月にかけての日平均気温は-0.4℃前後で、厳冬期でも-10℃を下回ることは珍しく、年間の気温較差は小さい。月平均降水量は、125mm程度で、降水量の少ない本市の中でも特に少ない地域と言える。風は静穏な日も多いが、南西または南南西の風が年間を通じて多く吹き、冬は北西の風が多い。初雪は11月初旬で、降雪量は比較的少ないが、3月下旬には大雪となることがある。

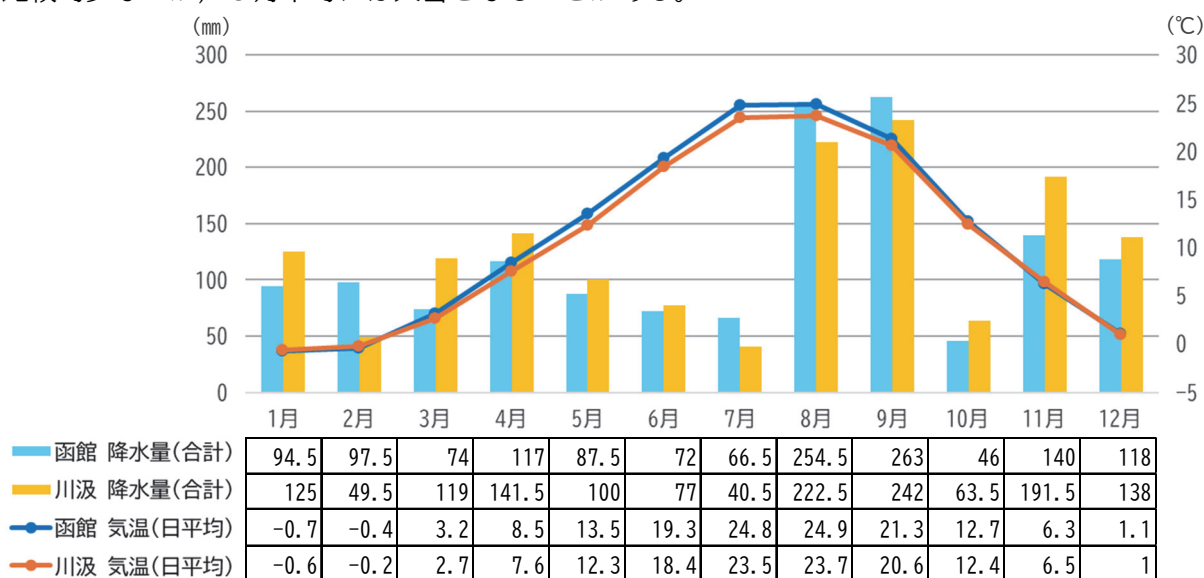


図2-7 函館・川汲の月別平均気温・降水量（令和7（2025）年）

気象庁の「函館」「川汲」の観測データをもとに作成

（3）社会的環境

ア 人口

現在の函館市は、平成16（2004）年12月1日に函館市、戸井町、恵山町、樞法華村、南茅部町の1市3町1村が合併して20年が経過している。

本市の人口は234,521人（男性106,815人、女性127,706人）で世帯数138,220世帯と、北海道内では札幌市、旭川市に次いで第3位の人口を有する。このうち、南茅部地域全体では4,088人、2,222世帯で、本史跡の所在する白尻町は493人、285世帯となっている（令和7（2025）年5月31日現在）。

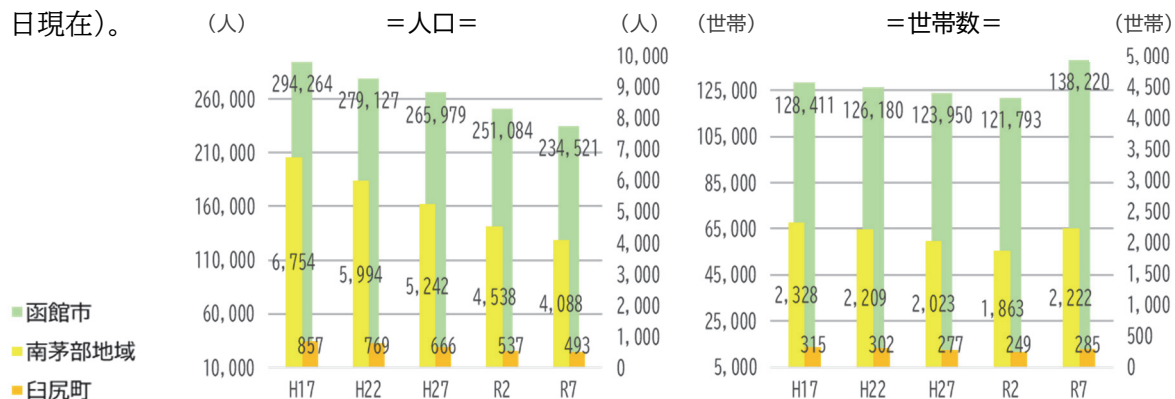


図2-8 函館市・南茅部地域・白尻町の人口と世帯数（令和7（2025）年5月31日現在）

国勢調査・住民基本台帳をもとに作成

人口は年々減少傾向にあり、道内他市と比較して減少数が顕著であるとともに、65歳以上の高齢者が占める割合は36%を超え、少子高齢化を反映した人口構成となっている。

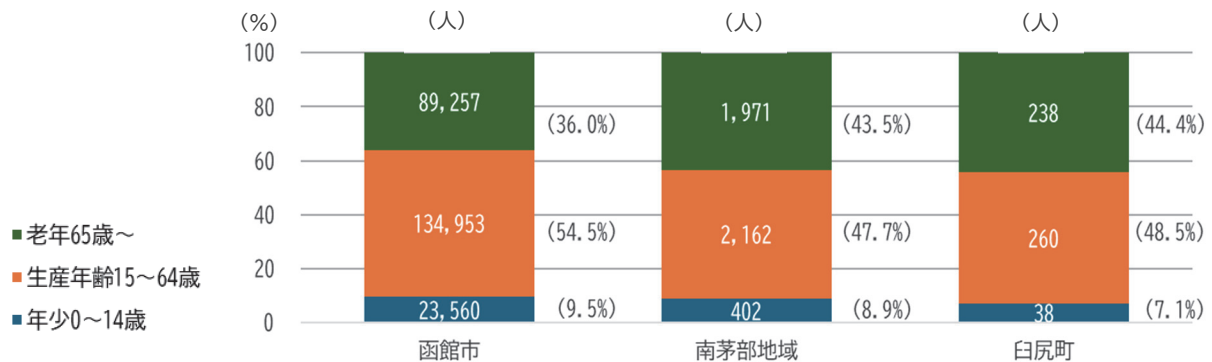


図2-9 函館市・南茅部地域・臼尻町の人口年齢割合（令和2（2020）年）

国勢調査をもとに作成

イ 産業・運輸

函館市の主要な産業のうち、第一次産業では沿岸漁業を中心とした水産業が盛んで、令和5（2023）年の漁獲量は、スルメイカ、マグロ、ブリ、キタムラサキウニ、養殖を含むコンブが全道1位、ミズダコ、ホッケなども上位となっている（令和7（2025）年度 函館市農林水産概要）。

特にコンブは国内生産量の9割以上が北海道産だが、函館産はこのうちの約3割を占め、生産量・生産高ともに日本一である。

三方を海に囲まれ、水産資源が豊富で天然の良港に恵まれている本地域は国内外から多くの人や物が集まり、海運や貿易の拠点として栄え、江戸時代後期の開港を契機に、北洋漁業の基地としての役割が加わって発展してきた。

平成28（2016）年3月には北海道新幹線が開業し、函館市の観光入込客数は560万人を超えたが、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて令和2・3（2020・2021）年度には大きく減少し、観光業をはじめ取引がある関連産業が大きな影響を受けた。こうしたなか、令和4（2022）年度からは国内・訪日外国人観光客ともに徐々に回復し、令和5（2023）年には台湾との定期航空路線や海外からのクルーズ客船の寄港も再開した。さらには本市が舞台のアニメ映画が公開されたことなどによる影響もあり、令和6（2024）年度の観光入込客数は過去最高の602万人となっている。令和7（2025）年6月からは韓国との定期航空路線が就航し、また函館空港－羽田空港線が1往復増便になるなど、観光客数の増加を後押ししている。

陸路では北海道縦貫自動車道（道央自動車道）が、隣接する七飯町の大沼公園インターチェンジまで延伸している。また、函館市桔梗町の函館インターチェンジを起点として、函館市上湯川町の函館空港インターチェンジへ至る高規格道路（函館新外環状道路）が令和3（2021）年3月に開通し、渋滞緩和や道南一円のアクセス向上に寄与している。



写真2-5 コンブ漁の様子
（令和2（2020）年6月撮影）



写真2-6 大謀網漁の様子
（平成21（2009）年10月撮影）

ウ 交通アクセス

本史跡は、市内中心部から直線で北東へ約25kmの距離にあり市街地から山間を抜ける道道83号線を通り、南茅部地域の川汲町で国道278号に接続した後、鹿部町方向へ伸びる尾札部道路(バイパス)沿いに位置する。なお、本地域には鉄道が通っていないため、二次交通の手段はバスを含む自動車による移動となる。史跡までの主要なアクセスは次のとおりである。

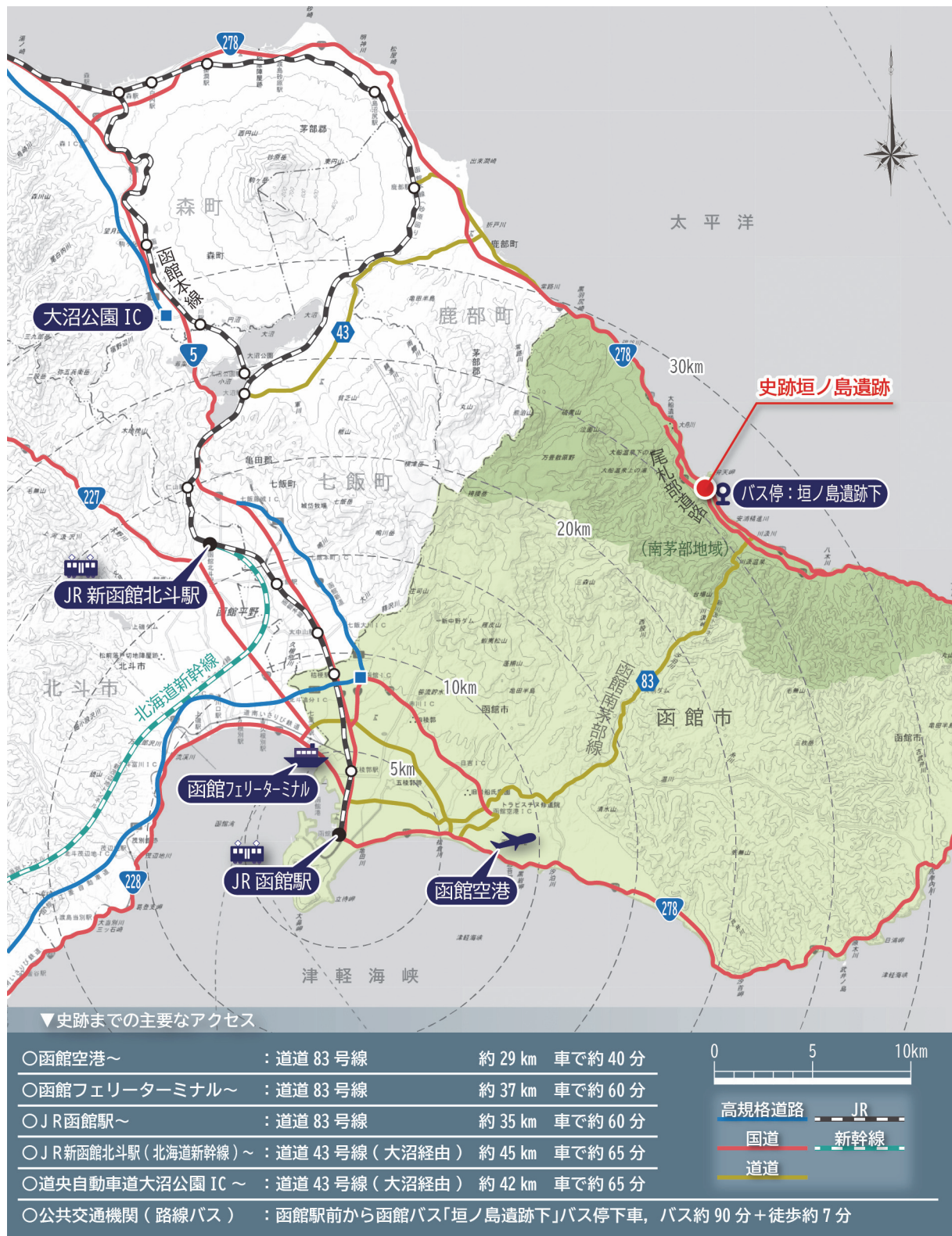


図2-10 主要な交通アクセスポイント (S=1/30万)

地理院地図(国土地理院)をもとに作成

(4) 歴史的環境

ア 函館市の歴史

本市は、豊かな水産資源と天然の良港に恵まれていることから、いにしえより海と共に繁栄してきた。中世には道南十二館の一つとして知られる志苔館が築かれ、江戸時代には北前船による交易で賑わった。また、安政6(1859)年には、幕府が長崎、横浜と並び箱館（現在の函館）を日本初の国際貿易港として開港したため、西洋文化の影響をいち早く受け、さらに明治維新の戊辰戦争の際には新政府軍と旧幕府脱走軍との最後の戦い（箱館戦争）の舞台となった。

明治以降は北海道の玄関口として発展し、青函連絡船の運航や函館空港の開港、青函トンネルの開通、北海道新幹線の開業など、津軽海峡を挟んだ本州との交流の拠点としてさらに重要性を増している。

こうした恵まれた自然や地勢によって栄えた本市の歴史は、先史時代にも遡ることができる。現在、函館市域では325か所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、旧石器時代から今日に至るまで人々が連綿と生活を営んでおり、特に本州との交流は様々に変化しながらも繋がってきたことが遺跡や歴史資料から窺える。

イ 南茅部地域の歴史

(ア) 先史時代

南茅部地域においては、水産資源が豊富な太平洋をはじめ、緑豊かな山々や多くの河川など多様な自然環境に恵まれていることから狩猟、漁労、採集を基盤とした縄文文化が栄えていた。縄文時代早期から晩期にわたる90か所以上の縄文遺跡が所在しており、本史跡をはじめ大規模な集落跡が数多く確認されている。

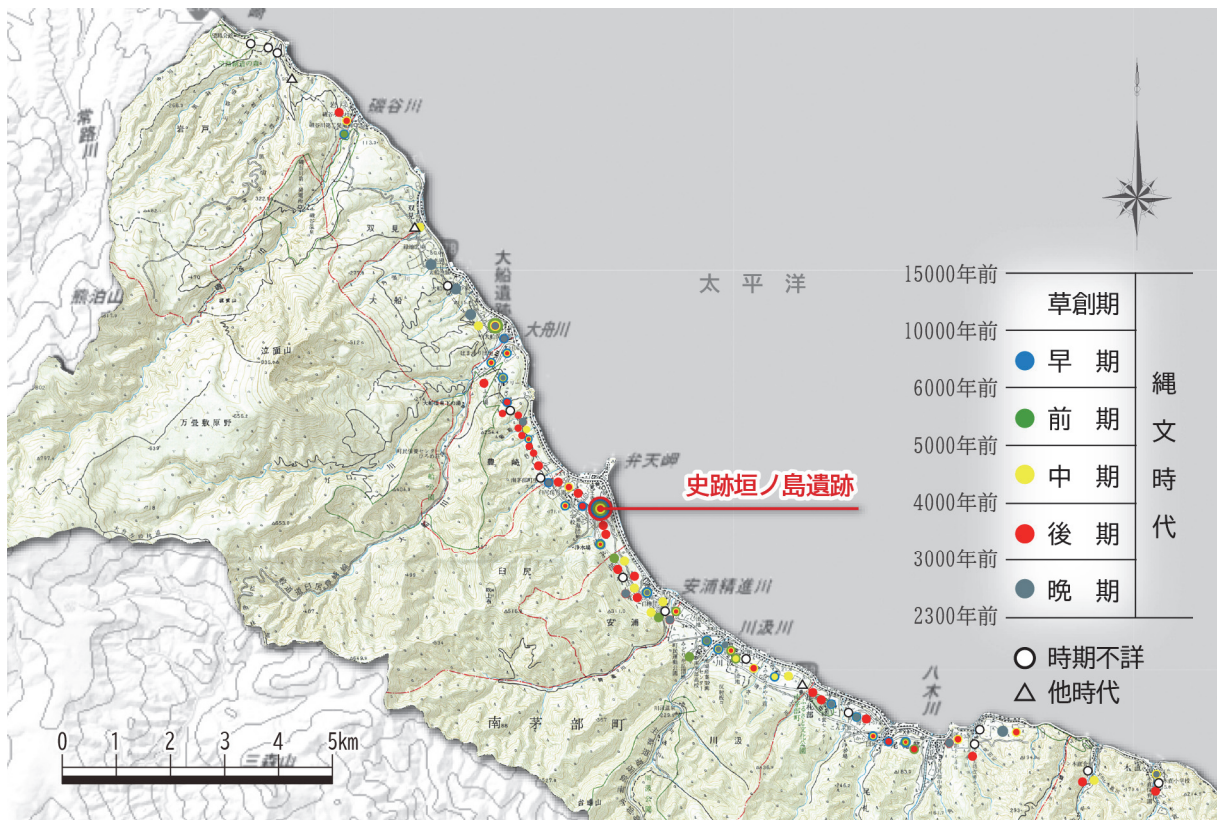
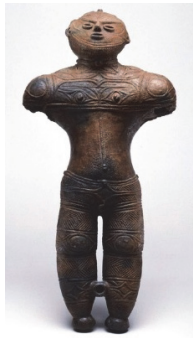


図2-11 南茅部地域の埋蔵文化財包蔵地 (S=1/14万)

地理院地図(国土地理院)をもとに作成

昭和38(1963)年の黒鷲遺跡の発掘調査を嚆矢として、50年以上にわたり実施してきた発掘調査による出土品は400万点を優に超えている。その中には、著保内野遺跡出土の国宝「土偶」(中空土偶)や八木B遺跡出土の函館市指定文化財「注口土器及び下部有孔土器」,本州との交易を示すヒスイやアスファルト塊のほか、大船遺跡出土の擦石や石皿,クジラやマグロ,クリといった豊かな生態系を示す動植物遺存体など、我が国の歴史と文化を語るうえで貴重な考古資料も数多く発見されている。このように限られた範囲ながらも特徴的な地域を形成していることから、本市ではこれらの南茅部地域に集積する遺跡群の活用に向けて、平成18(2006)年3月に「函館市南茅部縄文遺跡群整備構想」を策定している(第1章(4)参照)。



国宝「土偶」
(著保内野遺跡)



注口土器と下部有孔土器
(八木B遺跡)



土器に入ったアスファルト塊
(豊崎N遺跡)



ヒスイ装飾品
(著保内野遺跡)



石皿
(大船遺跡)



クジラ椎骨
(大船遺跡)

写真2-7 主な出土遺物1

本史跡周辺には多くの縄文時代遺跡が分布している。垣の島川を挟んだ対岸には、縄文早期前半の土坑墓から漆の装飾品が出土した垣ノ島B遺跡や、後期の垣ノ島C・D遺跡があり、史跡北西側は、沢地形(現市道)を隔てて、早期から後期の遺構・遺物が確認された白尻A遺跡や電電公社合宿舎遺跡が隣接する。さらに、北西の海岸段丘上には、中期を主体とする300軒以上の竪穴建物跡や土坑墓が検出された大規模な集落跡である白尻B遺跡があり、そこから出土した縄文中期後半のシカ絵画土器は函館市指定文化財に指定されている。さらに後期後半の「地鎮山タイプ」と呼ばれる方形の配石遺構や特徴



図2-12 史跡周辺の埋蔵文化財包蔵地 (S=1/4万)
地理院地図(国土地理院)をもとに作成

的な出入口構造を持つ竪穴建物跡が多数検出された白尻小学校遺跡や、函館市指定文化財に指定されている後期後半の赤彩土器が出土した白尻C遺跡などがある。

このように縄文時代の遺跡が数多く存在する南茅部地域にあって、本史跡周辺の白尻地区は特に遺跡の密度が高く、かつ重要な学術的成果が挙げられている地区であり、本史跡はその中でも縄文各期を通して地域の拠点的な集落であったと位置付けられる。

なお縄文晩期以降については、主体となる遺跡は確認されておらず遺物が散見される程度であるが、白尻小学校遺跡から晩期前半に相当する土器が複数個体出土している（令和7（2025）年度末 報告書刊行予定）ほか、白尻C遺跡では後期後半の竪穴建物跡の覆土中から壺を伴う晩期後半期の墓が検出されている。後続の続縄文文化期においては、電電公社合宿舎遺跡から後北式に相当する土器片が出土している程度で、遺構は検出されておらず、遺物の出土も極めて少ない。擦文文化期においてもその傾向は顕著であり、白尻B遺跡で内外面にハケ目の見られる土器片が出土しているのみで、縄文晩期以降において当該地域の利用は極めて少ない。



土坑墓に副葬された漆製品
（垣ノ島B遺跡）

シカ絵画土器
（白尻B遺跡）

赤彩土器
（白尻C遺跡）

写真2-8 主な出土遺物2

(イ) 歴史時代

史料にみえる南茅部地域の歴史は、延宝5（1677）年、能登の飯田屋与五右衛門が八木浜（現尾札部町）へ漁業のために来住したことに始まるとされる。近世には商場知行制に基づく松前藩の箱館六箇場所（持場）中で最大の場所である尾札部場所に含まれる。尾札部場所は南茅部地域の中央東寄り流れる八木川と尾札部川の間を拠点に、東は亀田半島東端、西は松屋崎（現森町砂原地域）で、約62kmの海岸線に設定されていた。近世には松前藩主直轄領、松前藩の重臣新井田家の知行地や幕府直轄地などになっており、また和人とアイヌの人々との交易場所である運上屋が尾札部と白尻にあった。産物はコンブ、ノリ、ニシン、イリコ、干鰯、魚油、オットセイなどで、恵山岬から木直までの約12kmの険しい断崖の続く前沖はブリ、マグロ、タラの有数の漁場で、尾札部川から西方の鹿部川下での磯浜は良質なコンブの産地であった。特に当地域の昆布は北前船の時代から白口浜真昆布と呼ばれ「天下昆布」、「昆布の絶品」（『蝦夷嶋奇観』）とされ、江戸時代には將軍家への献上品とされた。



図2-13 蝦夷嶋奇観

本史跡が所在する「白尻」の名称は、正保元(1644)年『正保御国絵図』に初出するが、原本は失われているため、その写しである『正保日本図』で確認することができる。寛政12(1800)年、和人の集落化が進んだことから、幕府は白尻を含む箱館六箇場所を和人地と定め村並とした。安政5(1858)年に白尻は正式に村となり、現在の南茅部地域の西半部にあたる板木・熊泊・磯谷を持場として含んだ。

文政期(1818~1830年)に南部三陸地方で発達したニシン建網(大謀網)が天保10(1839)年に白尻・尾札部に伝わったことから、当地域は北海道大謀網(定置網)漁業発祥の地となった。尾札部町黒鷲岬にはこれを記念する石碑が建立され市指定史跡となっている。

明治2(1869)年の国郡画定では渡島国茅部郡に所属、明治6(1873)年に白尻村から熊泊村が独立し、明治39(1906)年に白尻村は熊泊村と合併し白尻村として尾札部村とともに二級町村制を施行した。なお、明治9(1876)年に尾札部村から楳法華村を分村している。

昭和34(1959)年5月に白尻村・尾札部村が合併し、南茅部村を経て、同年9月に町制を施行し南茅部町となった。平成16(2004)年12月1日には戸井町・恵山町・楳法華村とともに函館市と合併した。

なお、町名の「白尻」とは、アイヌ語の「ウス」(湾)、「モシリ」(島=弁天島)が由来であろうという説がある。白尻地区が弁天島と陸繋島を形成していることから名づけられたと考えられる。



図2-14 正保日本図
国立歴史民俗博物館所蔵



写真2-9 北海道建網大謀網
漁業発祥の地及び
記念碑

(5) 文化財

本市には、令和8(2026)年3月現在、国指定文化財18件、国選定文化財1件、国登録文化財21件、北海道指定文化財19件、函館市指定文化財91件、計150件の文化財がある。

国・道指定の文化財は建造物や古文書など幕末から明治期にかけてのものが多く、函館の歴史的特色がよくあらわれている。加えて、北海道を特徴付けるアイヌ文化に関する資料も見られる。

このうち国の特別史跡に指定されているのは五稜郭跡の1件、史跡に指定されているのは、本史跡を含め四稜郭、志苔館跡、大船遺跡の4件である。また、先史時代(旧石器時代、縄文時代、続縄文時代)に属する文化財(史跡および考古資料)は、道指定史跡の恵山貝塚など19件である。

表2-1 函館市の文化財一覧

区 分	国			道	市	計
	指 定	選 定	登 録	指 定	指 定	
国宝	1					1
重要文化財	建造物	6				6
	美術工芸品	3				3
特別史跡	1					1
史跡	4			3	4	11
名勝	1				3	4
天然記念物					5	5
重要有形民俗文化財	1					1
重要無形民俗文化財	1					1
登録有形文化財			20			20
登録記念物			1			1
有形文化財	建造物			5	1	6
	美術工芸品等			11	71	82
重要伝統的建造物群保存地区		1				1
民俗文化財	有形民俗文化財				5	5
	無形民俗文化財				2	2
計	18	1	21	19	91	150

表2-2 先史時代に属する文化財一覧

<国指定>

No.	区分	名称	時代	所在地	指定年月日
1	国宝	土偶	縄文	函館市白尻町551-1 縄文文化交流センター	2007/6/8
2	重要文化財	北海道豊原4遺跡土坑出土品		函館市白尻町551-1 縄文文化交流センター	2016/8/17
3	史跡	大船遺跡		函館市大船町	2001/8/13
4		垣ノ島遺跡		函館市白尻町	2011/2/7

<道指定>

No.	区分	名称	時代	所在地	指定年月日
1	有形文化財	樽岸出土の石器	旧石器	函館市青柳町17-1 市立函館博物館	1957/12/20
2		楸法華出土の尖底土器	縄文	函館市青柳町17-1 市立函館博物館	1968/3/29
3		日ノ浜遺跡出土の動物土偶		函館市青柳町17-1 市立函館博物館	1970/2/12
4		サイベ沢遺跡出土の遺物		函館市青柳町17-1 市立函館博物館	1971/3/5
5		住吉町遺跡出土の遺物		函館市青柳町17-1 市立函館博物館	1971/3/5
6	史跡	恵山貝塚	続縄文	函館市柏野町	1967/3/17

<市指定>

No.	区分	名称	時代	所在地	指定年月日
1	有形文化財	恵山貝塚出土品を中心とする恵山文化期骨角器製品一括資料506点並びに恵山貝塚出土遺物を中心とする恵山式土器一括資料62点(いずれも旧能登川コレクション)	続縄文	函館市青柳町17-1 市立函館博物館	1962/11/3
2		日ノ浜遺跡出土硬玉製玉(縄文晩期)	縄文	函館市青柳町17-1 市立函館博物館	1962/11/3
3		有舌尖頭器類73点	旧石器	函館市青柳町17-1 市立函館博物館	1964/11/3
4		白尻B遺跡出土『シカ絵画土器』	縄文	函館市白尻町551-1 縄文文化交流センター	2000/8/10
5		八木B遺跡出土『注口土器及び下部有孔土器』		函館市白尻町551-1 縄文文化交流センター	2000/8/10
6		ブラキストンの大形磨製石斧		函館市青柳町17-1 市立函館博物館	2006/4/12
7		白尻C遺跡出土の赤彩土器		函館市白尻町551-1 縄文文化交流センター	2017/5/10
8		戸井貝塚出土品	函館市青柳町17-1 市立函館博物館	2019/12/25	
9	史跡	日ノ浜遺跡		函館市高岱町	1959/8/1

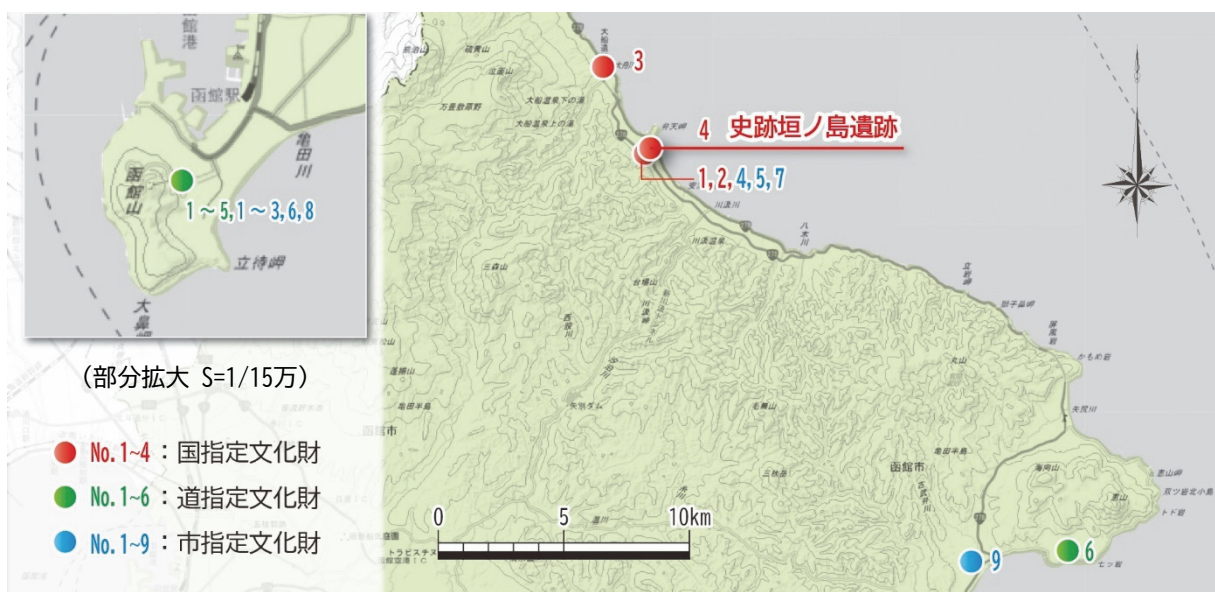


図2-15 先史時代に属する文化財位置図 (S=1/30万)

文化財に指定されている考古資料は、いずれも市立函館博物館または縄文文化交流センターで所蔵しており、学芸員資格を持つ専門職員のもとで保存・管理している。また、史跡についても現況調査のほか状況確認を都度行うなどして、適正な保存管理に努めている。



大船遺跡



北海道豊原4遺跡土坑出土品



榎法華出土の尖底土器

写真2-10 先史時代に属する文化財

(6) 観光

本市は、国内屈指の観光都市として人気が高く、観光業は基幹産業の一つとなっている。令和6(2024)年度の観光入込客数は約602万人で、過去最高を記録した。夜景で人気の高い函館山からの眺望など良好な景観や温泉施設などに恵まれ、伝統的建造物群や特別史跡五稜郭跡など歴史的な建造物や史跡が数多く存在し、新鮮な魚介類など食の魅力も来訪の目的となっている。近年は、クルーズ船の寄港地としても人気が高く、従来の台湾や中国などのアジア圏のほか、欧米豪からの観光客が増加しており、国内外からの観光誘客による経済効果と市民生活が調和した持続可能な観光地づくりに取り組んでいる。

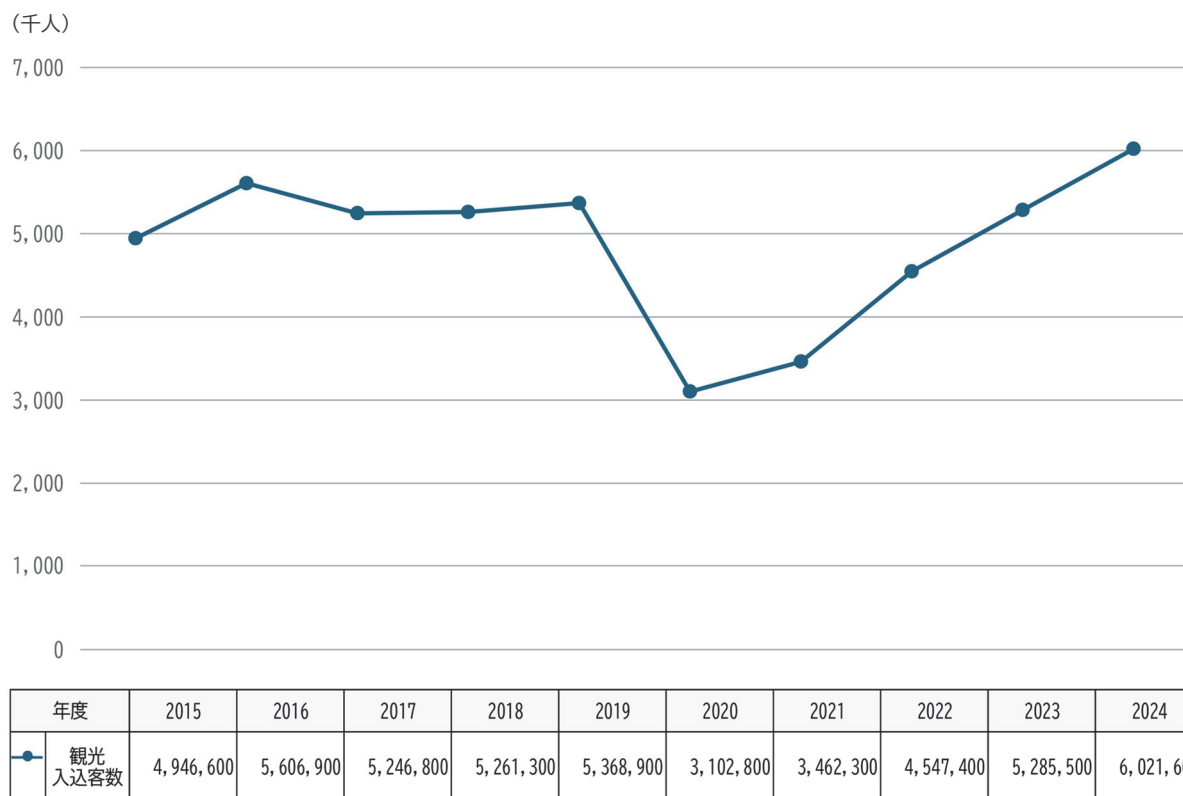
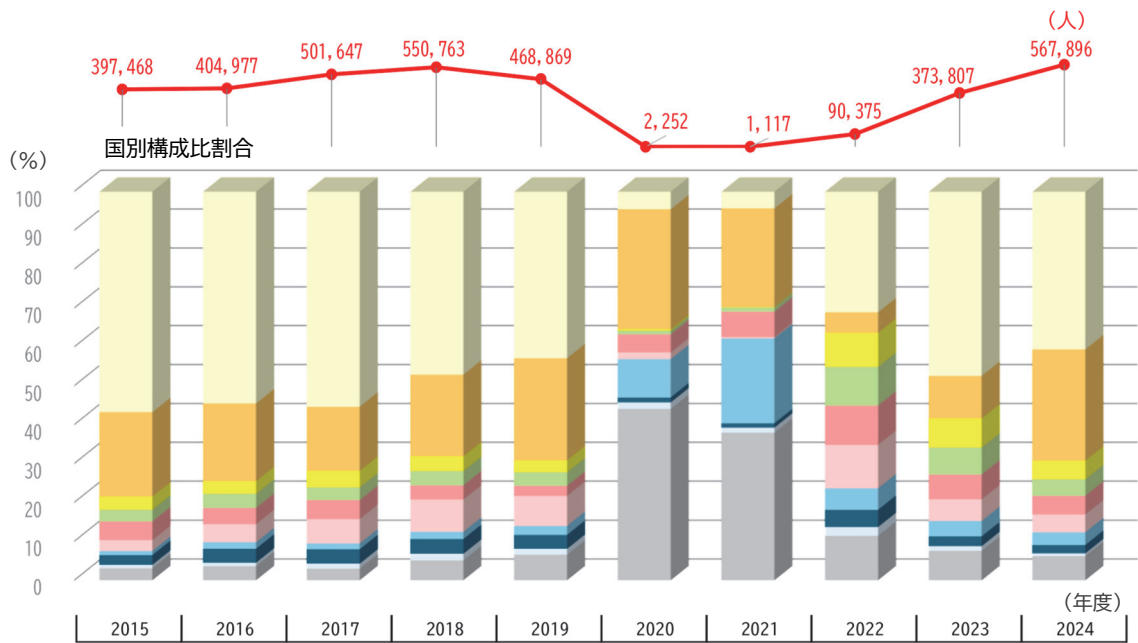


図2-16 観光入込客数の推移

函館市ホームページ「来函観光入込客数推計」をもとに作成



	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
台湾	225,518	220,684	277,606	259,278	200,903	102	48	28,046	177,156	230,438
中国	86,317	81,081	82,782	115,620	123,228	696	284	4,789	40,977	162,716
香港	13,416	13,067	21,276	20,941	14,343	8	1	7,906	27,997	27,038
シンガポール	11,867	14,555	16,342	20,267	16,213	20	12	9,000	25,850	23,970
韓国	19,122	17,020	24,428	20,092	12,285	106	73	9,135	23,927	27,466
タイ	11,106	18,841	31,583	45,729	36,195	39	4	10,094	20,718	25,898
アメリカ	4,265	6,753	7,467	10,236	10,884	222	244	4,997	14,867	18,667
マレーシア	9,805	14,424	18,447	20,794	16,677	28	12	3,983	9,267	12,020
インドネシア	3,753	3,665	6,564	9,373	7,205	38	15	2,062	4,637	4,263
その他	12,299	14,887	15,152	28,433	30,936	993	424	10,363	28,411	35,420
合計	397,468	404,977	501,647	550,763	468,869	2,252	1,117	90,375	373,807	567,896

図2-17 国別外国人宿泊客数の推移

函館市ホームページ「来函観光入込客数推計」をもとに作成



図2-18 主な観光・レクリエーションスポット

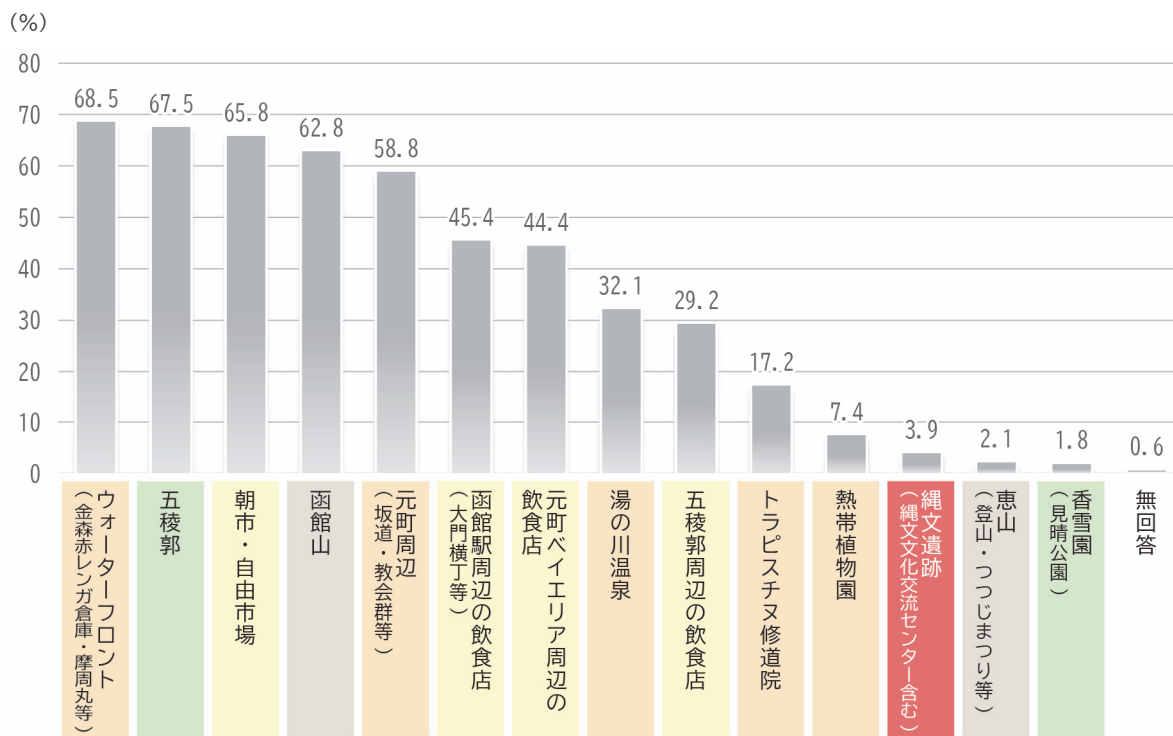


図2-19 国内旅行者の訪問率（令和4(2022)年）

函館市ホームページ「令和4年度(2022年度)函館市観光動向調査」をもとに作成



金森赤レンガ倉庫



摩周丸



特別史跡五稜郭跡



朝市



函館山からの眺望



八幡坂



ハリストス正教会



旧函館区公会堂



大門横丁

写真2-11 主な観光スポット